



## 年頭のご挨拶

(社)日本測量協会北陸支部長

鹿田 正昭

新年明けまして、おめでとうございます。

平成23年（2011年）の年頭にあたり、皆様とともに謹んで新春をお祝いいたします。

(社)日本測量協会、とくに、北陸支部の皆様方には平素から測量系を含む地理空間情報を中心として、多くのご支援とご協力を賜っておりますことに対し、衷心より御礼を申し上げます。

さて、測量系業務を主として遂行されている皆様方にとって、昨年の大きな関心事は準国産測地衛星である準天頂衛星「みちびき」(QZS-1)が打ち上げられ、実証実験が実施される段階に入ってきたことではないかと推察しています。

準天頂衛星は準天頂軌道といわれる日本のほぼ真上（天頂）に軌道を持つ測地衛星で、現在運用されているGPS信号とほぼ同一の信号を送信するとともに、LEX信号（cm級測位）とL1-SAIF信号（m級測位）を送信することで、都市部や山間域の高い建物や山などの障害を受けることなく精度の高い測位ができると期待されています。

「みちびき」は、宇宙航空研究開発機構（JAXA）および関係研究機関によって初期調整が行われた後、JAXAと関係研究機関による技術実証が実施されると同時に、民間・関係省庁による利用実証を行う計画がすでに進行しています。小生が勤務する金沢工業大学の「KIT空間情報プロジェクト」の一環として、日本測量協会北陸支部管内の測量系企業および建設系コンサルタントを中心に声をかけさせてもらったところ、7社から参加希望があり、以下のテーマで申請して採択されました（申請時のテーマ）。

「建設コンサルタントおよび測量設計業務をコアとした北陸地方の都市域・山間域・移動体計測の位置精度向上に関する検証」

「みちびき」は現状では1機のみでの運用となりますが、将来3機運用となり24時間利活用ができるようになれば、衛星が常時ほぼ真上に位置することで、山間部や都心部の高層ビル街などGPS衛星からの電波が届かない場所や時間においても測位ができ、測位精度の向上、地図の更新作業効率の改善、情報化施工などの省力化、ITSへの応用や観光への応用などさまざまな分野での利用が期待されています。測量協会北陸支部としては北陸地方から最先端の衛星測位技術を活用した応用事例の発信がなされることを期待しているところです。

さらに、もう一点、「地理空間情報の活用推進に関する北陸地方産学官連絡会議」が2年目に入り分科会も活動を開始したことであります。この会議は、申すまでもなく地理空間情報活用推進基本法に謳われた方針により、国土地理院の各地方測量部において活動を開始したものです。会議には産学官併せて20近い団体・個人が参画しており、当協会も「産」の一翼を担う団体として参加しております。昨年の11月には要綱に謳われた「分科会」の初会合が新潟県で開催されました。平成23年度も継続して実施されると聞いております。地理空間情報が有効かつ活発に利活用されるためには、産学官の協力が重要なポイントになってきております。支部会員の皆様には「産」の立場から連絡会議へのご協力をお願いしたいと考える次第です。

さて、話題を少し変えまして、測量の歴史にとってなくてはならない伊能忠敬に関する話題です。昨年(2019年)の10月23日(土)と24日(日)の2日間、金沢工業大学第43回工大祭併催事業として「完全復元伊能図全国巡回フロア展 IN 金沢工業大学」が開催されました。この事業は伊能忠敬が55歳で日本列島の測量を開始してから本年で210周年を迎え、また関連資料が先頃国宝に認定され、その偉業があらためて注目を浴びたことから数年前から企画されて全国を巡回しているものです。

両日で3100名を超える来場者があり、特に親子連れの姿が目立ちました。工学教育、特に測量技術の啓蒙として、伊能忠敬の偉業を目で見るとともに、直接触れることにより学生を含む若い人たちや、将来は空間情報系技術者となるかもしれない子供たちが多くのことを伊能図から学んでくれたようでした。開場式には現国土地理院長の小牧和雄氏、前院長の藤本貴也氏、元院長の星埜由尚氏の歴代院長3氏が出席されました。藤本氏には特別講演もおこなっていただきました。また、共催団体として当協会本部および北陸支部も協力していただきました。ご協力いただいた各位には紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、(社)日本測量協会の今後の益々の発展と会員皆様方のご健勝とご活躍、さらにご家族の皆様のご多幸を祈念して、年頭のご挨拶とさせていただきます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

金沢工業大学環境・建築学部  
環境土木工学科 教授